



2024（令和6）年5月30日発行
（編集）愛光本部企画室
（TEL）043-484-6391
（HP）<https://www.rc-aikoh.or.jp/>

2024（令和6）年度がスタートしました。法人では、4月1日から4日までの4日間、新任職員対象の研修が行われました。初めて学ぶこと、得ることも多い、4日間の研修となりました。

新任職員方々には、今もっている気持ちを忘れずに、困った時に相談できる仲間を作り、いろいろな出会いを大切に、成長していただきたいと思います。

□事業経過など（2024.4.1～）

1	月	辞令交付式/新任職員研修初日
2	火	新任職員研修2日目/業務執行会議/人材育成PT
3	水	新任職員研修3日目/地域食堂委員会
4	木	新任職員研修4日目/メンティーメンターマッチング研修
5	金	本部実績会議/本部スタッフ会議
8	月	嚙下研修
9	火	コ・ヒューマン WT/防災委員会機械室整理/衛星・感染症委員会
11	木	広報委員会/GHPT
12	金	灯台運営委員会
15	月	嚙下研修
17	水	地域食堂ともいき/栄養改善委員会
18	木	研修委員会
20	土	あいとひかりのコンサート
21	日	福祉人材センター説明会
22	月	嚙下研修実践発表会
24	水	地域福祉事業部実績会議/障害者支援事業部実績会議/財務PT
25	木	高齢者福祉事業部実績会議/はちす苑経営改善PT
26	金	ボランティア委員会
27	土	山王みらいP
28	日	オレンジカフェ
30	火	法人コンプライアンス委員会

■月報から

□新年度 『みんな笑顔で想いを形に』（ルミエール）

2024年度ルミエールのスローガンである。昨年度中から全職員にスローガンを考えてほしいことを伝え、職員の想いを形にしたものである。この『笑顔』には利用者だけでなくご家族、職員、利用者に関わるすべての人たちが含まれている。ご家族が面会で来所された時に一番喜ぶのが利用者の笑顔を見ることである。その姿を見て職員も笑顔になる。まさに笑顔の連鎖である。もちろん利用者の笑顔を見るために施設職員は知識、経験を持って利用者支援にあたってルミエール利用者の幸せを目指している。今までもこれからも『想い』を持って『形』につなげられるよう取り組んでいきたい。

（ルミエール課長 原 宏之）

□ 新しい知識 “完全側臥位法”（めいわ）

昨年10月から月3～4回、約半年間にわたる摂食嚥下ケア研修に1名の職員が参加していた。講師である摂食嚥下障害看護認定看護師に指導を受けながら、講義とともに実際に嚥下に課題のあるめいわ利用者Mさんを対象に改善に向けた取り組みを行っていくという実践的な研修だった。22日、その長期に渡る研修の集大成として“取り組み発表会”が行われた。これまで取り組んできた利用者への支援と、その利用者の嚥下が改善されていく様子について説明があった。嚥下の仕組みを5期の工程に分けて、本人の嚥下の状態のどの過程に課題があるかを分析、その過程ごとに必要な支援を行っていた。

〔完全側臥位法〕とは文字通り、横向きに寝た状態で食べる方法である。頭でイメージすると食べにくいと思ってしまうが、実際にMさんが食べる様子を見ると、むせ込みなく食べることができ、食事介助する側も安心して提供できる方法だと分かった。これらの方法は、本人の残存機能によって向き不向きがあるようだが、Mさんに関しては、間違いなくむせ込みが減り安定した食事ができるようになった。

高齢化が進む施設の中で、Mさん以外にも嚥下が心配な利用者は複数いる。発表会のあと、研修に参加した職員は他の利用者の食事についてアドバイスをしてくれている。日常業務の合間の中で長期間大変な研修だったが、努力した分、素晴らしいスキルを身に着けることができたようである。利用者居としてプラスになることであり、後日、施設内でも研修を実施し、職員同士で完全側臥位法の食事介助をすすめていきたい。楽しく頭をアップデートしよう。

（めいわ課長 中田 憲一郎）

□新規利用者の受入れ（根郷通所センター）

昨年度、実習として受け入れた特別支援学校卒業生が、今月より新規利用者として利用を開始した。当該利用者の住まいは佐倉地区であったため、新たに佐倉地区の送迎ルートを開始することとした。昨年の後半より稼働率が100%を切ったこともあり、何とか受入れを実現しようと現場の臨機応変な動きが実を結んだ。

これにより今月からは稼働率が100%を超えることとなる。受け入れ限度まで3名の利用者の受入れが可能であるため、引き続き、新規利用者の獲得へ向け、支援技術の向上とハードの両面を整え多様なニーズに応えられる事業所づくりを行うこととする。

（めいわ通所部所長 菊地 暁生）

□あいとひかりのコンサート（リホープ）

20日 四街道文化センターで開催された、さくらまやさんのコンサートに利用者10名、職員4名が参加した。お二人のヒット曲だけでなく、色々な世代の利用者にも聴き馴染みのある曲が披露され、迫力ある歌声に魅了された。友情出演の一条貫太さんは元リホープ職員のご子息とのことで、当初からいる利用者はお母様の旧姓も良く覚えていた。一条貫太さんのMCでは大笑いして楽しかったとの感想も聞かれた。「ここはつまらないよ。」が口癖の利用者も「来て良かった。今度は俺のコンサートも開いてくれよ。」と上機嫌で笑顔を見せていた。後日、さくらまやさんから点字でお礼状をいただいた。心のこもった手紙には「今度は施設にも行ってみたいです。」との一文もあり、点字を読んだ利用者は、ぜひ来てもらいたいととても喜んでいた。

（リホープ課長 稲垣 直子）

□担当制（山王の家）

これまでは全員担当体制で行ってきたが、今年度から利用者個々に担当をつける事にした。以前より「支援が単発になってしまい継続性に欠けている、利用者の情報が共有出来ていない」との思いがあった。必要な支援を漏れることなく利用者へ届ける為、担当が中心となって積極的に利用者に関わってもらう、その上で他職員からも情報収集し、担当からも情報発信し支援していく。これを繰り返していく事で職員間の連携をさらに強められたらと思っている。支援方法も色々な立場の職員に関わる事で色々な方法が浮かんでくればと思っている。

（山王の家管理者 岡本 綾子）

□2024年度スタート（ワークショップかぶらぎ）

2024年度がスタートした。今年度のスローガンは『人と繋がる場所～あるべき姿 になりたい姿を取り戻す』としている。今回も事業所スローガンは現場スタッフからのアイデアを中心に、投票などを通じて決定した。

現場スタッフが今、事業所や自らの仕事をどのように捉えているかも併せて推しはかることができ、興味深い決定過程であった。

また、この4月より就労継続支援B型事業の定員を18名から24名に変更した。自立訓練の6名と併せて平成27年開設当初の30名定員に戻すに至った。

定員数が増えたため、稼働率としては一旦前月比で落ちる計算になるが、月間延べ人数や1日の平均利用人数は上昇傾向である。今年度は自立訓練を含めた30人定員での合算稼働率を平均85%までもっていくのが事業計画上の目標数値となっている。

（ワークショップかぶらぎ主任 宮部 和樹）

□新年度も頑張ろう！（よもぎの園）

新年度は特別支援学校の卒業生1名が加わり42名でスタートした。最近是一日の平均利用者も37名程度で多い日には40名の利用となってきた。人数が増えればそれだけ生産力も上がってくるはずだが、各々の強みを上手く活かしながら作業提供できなければ思うような成果は得ることができない。

利用者への作業提供は売り上げを少しでも伸ばしていく為におこなっているもので、生産性の向上は必須である。新人利用者には、本人が取り組みやすいよう簡単な作業提供から始めていくが、課

題としては「簡単な作業＝低単価」なことが多い。ただ、取り組みやすい作業があることは事業所の強みでもあるので、簡単な作業を入り口にしながら本人の持っている力をいかに発揮できるように支援をしていってもらいたい。

今年度のスローガン「Co-Challenge」を事業所一丸となって取り組んでいきたい

(佐倉市よもぎの園主任 近藤 真一)

□新年度スタート（かけはし）

かけはし開所から3ヵ月。瞬く間に月日は流れ令和6年度がスタートいたしました。組織改編がおこなわれ、アシストが佐倉圏域事業部となり、より一層近しい距離での連携体制構築を進めていくことで円滑な協力体制の下での業務継続がおこなえるよう取り組みたいと思います。

2024年4月から適用される障害福祉サービス等の報酬改定内容が、厚生労働省から発表されました。計画相談支援では、基本報酬の引き上げや加算の拡充が多く実施されますが、他の障害福祉サービスと同様、基本報酬に適用される減算制度も設けられています。対応の漏れや不備によって減算に繋がることがないようにしていきたい。

(佐倉市よもぎの園管理者 戸室 輝大)

□臨時開館（佐倉市南部児童センター）

今年の小中学校の始業式は4月8日(月)。児童センターの公休日である。午前中で学校が終わる月曜日、子どもたちの居場所になればと思い、臨時開館をした。大概、始業式の午後は物凄い勢いで子どもたちが来館するのだが、事前に「8日は月曜だけど開いているよ」と告知をしていた割に思ったほど子どもたちは来館しなかった。はて？月曜定休が定着しているのだろうか？と思いつつ、そんな事を考えている場合ではない！ドッチボール大会の告知をしていたのだ。知っている子は張り切って来ていたのだが人数が足りない。高校生にも手加減頼みで参加してもらい職員も総出でチームに加担した。職員の本気モードと共に子どもたちもスイッチが入り、いつもとはまた一風違った雰囲気で大いに盛り上がった。私たちインストラクターは常に臨機応変な対応を求められる。いつ誰がどれだけ来るのか開けて見なければ分からないのが児童センター。想定外も想定内と捉えながら日々格闘している。

(南部児童センターインストラクター 吉田 知加子)

□新年度スタート（学童保育所）

新1年生を迎え入れる学童、進級し新しい仲間を迎える学童、一年生は戸惑いながらもすぐになじめる子、なかなか中に入ることができない子、時には涙も・・・そんな中1つ上の学年になった子どもたちは、お世話をしたり、積極的に話しかけたり・・・また、いままで学習を学童でしなかった子が、学習を始めたり・・・子どもたちそれぞれが新たな思いで新年度が始まっている。

(学童保育所主任 小出 博美)

□佐倉市の地域生活支援拠点（アシスト）

佐倉市に於ける地域生活支援拠点は、面的整備型を選択している。基幹相談支援センターが市内に2か所、短期入所、近年著しく増加しているグループホーム、日中活動系の事業と社会資源が豊富にあることを理由にしていた。とはいえ、実際に機能している実感は無く、対象のケースが発生した際に、障害福祉課含め基幹相談が中心となり調整を図っていたのが現状であった。

今回、障害者総合支援法の改正に伴い、佐倉市第7次障害者計画・第7期障害福祉計画の重要施策に位置づけられた。3月の佐倉市障害福祉関係機関連絡会にて、障害福祉課から整備手法について示されている。まずは、運営の根幹となる相談系事業所と入所系事業所の登録から始める方向だ。基幹相談支援センターのひとつとして、動向をしっかりと捉えていきたい。

（佐倉圏域事業部長 近藤 美貴）

□買い物支援 ～新たな資源～（南部地域包括支援センター）

買い物支援の地域資源として、南部圏域内にある「東武ストア石川店」から移動スーパーとくし丸が開始されるとの情報が入った。とくし丸とは、3月に始まったウェルシア移動販売とは違って、個人宅をまわる移動販売である。ドライバーさんはスーパーと委託契約をした個人事業主となるため、ドライバー次第で、一日にまわる訪問場所や戸数も検討できるとのことだった。

20日（木）に事業担当者3名が来訪され説明会を行った。事前に連絡を頂いていたため、居宅のケアマネジャーや根郷地区社協の支え合いサービスにも声を掛け説明会に参加してもらった。支え合いサービスからは買い物代行の支援が増加しているが、それに対してサポーターが少ないとの課題もあったため、住み分けができるといいのではないかと意見があった。ケアマネジャーからも駐車スペースがない場合や外に出られない方や荷物を運べない方への対応はどこまでしてくれるのか等、具体的な質問が挙がった。基本的には事前面談を行い、ご本人の意向を聞いてくださるとのこと。また近所の方も自由に買い物が可能であるため、地域のコミュニティとしての機能もあるとの説明を受けた。すでに対象エリア内の地区にはポスティングを行っているとのことだが、エリア外の地区も多いため、包括の生活支援コーディネーターが協力しニーズ把握を行った上で、検討していただけになった。

（南部地域包括支援センター管理者 森 由美子）

□夏本番にむけて（南部地域福祉センター）

近年の一日の最高気温が30度以上になる真夏日の増加と共に、熱中症の発症者の増加が社会問題となっている。佐倉市八街市酒々井町消防組合管内発表で、5月～9月の熱中症搬送件数が毎年増えてきているとのこと（昨年度の同地域での搬送件数は158人）。また、熱中症に関する対策は、佐倉市のSDGsの推進の中にもあることから、佐倉市気候変動対策室による、健康分野への適応策等が各広報等でも紹介されている。

南部地域福祉センターでも、今年の夏も多くの地域住民の利用が予想されるため、夏本番を迎える前に、熱中症が疑われるときの症状の特徴や、応急処置の方法などを確認しておく。また、南部地域福祉センターは、近隣の人が利用できる「涼み処」としての機能もあるため、地域の方が熱中症になる前にできる対策等を考え、必要な準備をしていきたい。

（南部地域福祉センター 青山 秀人）

□新卒職員 4 名入職 （はちす苑）

4 日間 新任職員研修の後、各自遅番トレからスタート。慣れない業務、認知症高齢者への対応、想定外の出来事に直面するなど、不安や緊張で一杯の毎日を送っているのではないか。その中でも大きく体調を崩すことなく 1 ヶ月を乗り切った。「上手くできない、思うようにできない、上達しない」悩むこともあると思うが、まずは、教えられたことを丁寧に確実に行う、入居者に寄り添うことが大切。入職して 1 ヶ月、4 名とも成長が伺える。

介護の基本姿勢は「自分に置き換えて考えてみる」つまり、自分がされて嫌なことは人にはしない。これは、相手の気持ちを慮って、心配し、どうすれば相手が少しでも不安に思わないか、嫌に思わないか、そして、どうしたら楽しく生活ができるのか、ということを考えてケアを提供する、ということである。

今は「上手くできなくてもいい、下手でもいい」一生懸命やっていれば、それは必ず入居者に伝わるので、慌てず状況や環境をふまえて、相手の心身面に配慮して対応してほしい。

（はちす苑 苑長 麻生 知明）